

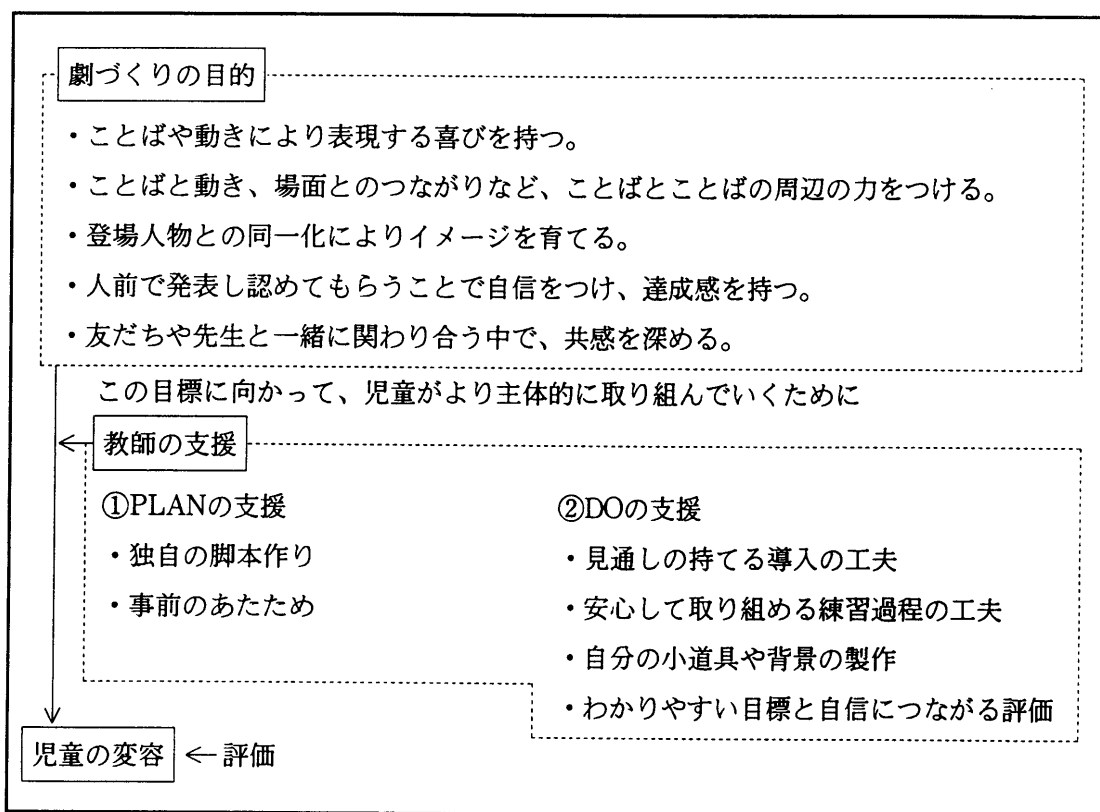
[3] 学習発表会 —— 児童の発達段階や個性に寄り添った劇づくり ——

(1) 学習発表会の概観

平成7年度の劇づくりの取り組みから、以下の点の大切さが浮き彫りとなった。

- ・意欲づけ
- ・見通しを持たせる
- ・個性を生かす
- ・自信をつけさせる
- ・個にあった表現方法を取り入れる
- ・安心感を持たせる

以上のことを念頭に置きながら、今年度は「プレーメンのおんがくたい」の劇に取り組んだ。劇づくりの構想を次のように考え、児童の発達段階や個性に寄り添った実践を試みた。



以下、上記のPLAN、DOにおける教師の支援についての具体例をあげる。

(2) 劇づくりにおける教師の支援について

① PLANの支援の中から

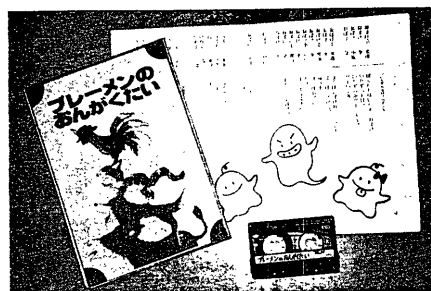
児童の発達や個性をふまえた独自の脚本作りについて

脚本作りにあたり、まず児童の個性が生かされる本校独自の登場人物を以下のように設定した。

◎ろば、いぬ、ねこ、にわとり	・それぞれの動物に、自分なりの愛着を持って取り組みそうな児童	Y子、K子、T男、S子 S男、H男、E女、N男
◎いたずらおばけ	・自我の充実・拡大期で、拘束場面の苦手な児童 ・人前で極度に緊張しやすい児童	K男、U男、M男 R子、B男
◎てんし	・女の子らしいドレスやダンスなどに強い興味を持ち、それが取り組み意欲を大きく左右する児童 ・自由な動きを好む児童	H子、O子、C子

また、ストーリーの設定については、できるだけ場面展開を単純にして繰り返しを多く取り入れ、見通しが持てやすいよう配慮した。また、拘束場面の少ない設定を心掛けた。

台詞はその子がよく使う表現を生かしながら、できるだけ言いやすく簡単な言葉を使い、言葉以外の表現法（動作、ダンスなど）も取り入れた。さらに、音響効果をふんだんに取り入れ、曲を聞くことにより登場する場面が自然にわかるよう配慮した。



自作の台本とテープ

「遊びの時間」を利用した事前のあたためについて

本単元に入る前の移行期間に「遊びの時間」を利用し、「ブレーメンのおんがくたい」の劇に自然に親しめるよう、登場人物にちなんだ「動物の鳴き声遊び」や「おばけおにごっこ」を取り入れた。どの児童も大喜びして参加し、登場する動物やおばけのイメージを膨らませたり、愛着を持ったりすることができた。そのことで、スムーズに劇づくりに移ることができた。

② DOの支援の中から

見通しを持ち意欲を高めながら劇に取り組める導入の工夫

劇の決定については、小学部の児童には、複数の物語を比較しながらよいものを選択するという能力がまだ十分育っていないと判断し、教師が提案して児童の賛同をうけて決定するという形を取った。提案にあたっては、「ブレーメンのおんがくたい」の話をもっと視覚的に訴えられるようペープサート劇にして提示した。ほとんどの児童が大変集中してペープサート劇を観て、「このお話の劇をしてみようか？」の問いかけに、「する！」と答えたり、表情や身振りでやりたい気持ちを伝えようとした。



ペープサート劇を見る児童

配役の決定にあたっては、児童の興味を事前に把握していたので、多くの児童が予想通りの配役に自分から名乗りをあげた。配役に対して特別に興味を示さないN男、T男には、補助者が軽く促した。いたずらおばけになりたかったK子は少し葛藤はあったものの、補助者から天使のよさを耳打ちされたことにより納得して天使を選んだ。


また、挿絵入りの台本と、台詞・音響を吹き込んだテープを、教師が作成した。それを各家庭でも見たり聞いたりするよう保護者に協力を依頼し、児童ができるだけ早く劇のストーリーに慣れるように配慮した。

安心して取り組める練習過程の工夫

立ち稽古の初期段階では補助者がそばにつき、ともに大きな声で台詞を言ったり動いたりして自信を持たせた。台詞に慣れてきたら次第に補助者が距離をとり、前方の指示者の合図で台詞が言えるよう支援した。自分の台詞の順番に自信のない児童には、少し前に台詞を耳打ちし、タイミングに合わせて軽く押し出すなどして慣れさせていった。また、その子なりの言いやすい台詞や表現方法があれば、それを取り入れ台本を変えていった。最終段階で声が小さい児童には、ワイヤレスマイクを使用した。さらに、合同練習で出てきた課題をクラスに持ち帰り、発達段階にあった方法で練習した（3組：台詞の読み、書き取り 1組：ペープサート劇のビデオの視聴 など）。

(3) 児童の様子と変容

ほとんどの児童が日を追うごとに自信をつけ、嫌がることなく劇づくりに参加した。また、学習発表会をめざして、毎日いきいきと学校生活を過ごした児童が多く見られた。以下、児童に見られた様子や変容の例をあげる。

氏名	様子・変容	
H子 (てんし)	普段は拘束場面を嫌うことが多いが、ドレスが気に入り天使の音楽になると自分から進んで舞台に出て、いきいきとダンスをした。小声だが、自分から台詞を言おうとする姿も見られた。	
B男 (いたずら おばけ)	人前では大変緊張し、7月のたなばた発表会では一言も台詞を言わなかったが、「いたずらおばけ」というコミカルなキャラクターにリラックスし、補助者と一緒に台詞を言うことができた。おばけの自己紹介の場面では、自分の名前の後に「さま」をつけてアピールしたり、自分でダンスの中に側転を入れたりするなどの工夫もした。自由な活動や少々ふざけた行動も、いたずらおばけという設定に合い、認めていけたことが、結果的にB男の自信につながった。	 <p>補助者と一緒に台詞が言えたB男</p>
Y子 (にわとり)	1年生で、初めてのため見通しがなく、練習の当初は拒絶しステージに上がらなかった。練習を強要せず、舞台下から2回見学させたところ、流れが分かれば練習に参加できた。練習中もできるだけ本児の行動を認め、寄り添うことで、みんなと一緒に取り組めることが多くなった。	
K男、U男 M男、R子 (いたずら おばけ)	発達段階から自制心がまだ持ちにくく、多動で拘束されると意欲を無くしがちな児童だが、「いたずらおばけ」という自由さのある配役となったため、思いどおりの行動がある程度認められ、喜んで参加することができた。また、それらの自由な動きやハプニングは、かえって劇そのものにおもしろさを与える結果となった。	

(4) 反省と課題

劇の終了後には、「遊びの時間」を利用して、自分のなりたい役に扮して遊ぶ時間を取った。どの児童も思い思いの役柄になり、音楽に合わせて自由に台詞を言ったり、ダンスをしたり、服装を工夫して身に付けたりするなど、喜々として取り組んだ。また、自由時間には子ども同士で自然におばけごっこを発展させて遊ぶ姿も見られた。大きな感動に支えられたり、自己選択をして主体的に取り組んだことに関しては、児童の中で搬化しやすく、それが生活の中へ返していけるものと思う。そして、それには、児童の発達や心情に寄り添った教師の支援が不可欠であったと感じる。

今後も、さらに発達段階に応じた思考の揺さぶりを取り入れながら、子ども一人ひとりに寄り添った支援の在り方を探っていきたい。(本城)



ほくたちは、いたずらおばけ!



さあ、次は何になって遊ぼうかな?
(遊びの時間)